中世のサムライヒーロー

楠公さんを知ろう

第5回

楠木正成の魅力を探る

～奥河内に育まれた「先見する心」～

阪南大学　国際観光学部　准教授　和泉大樹（いずみだいき）

▲楠木正成自筆書状
（天野山金剛寺所蔵）

天野山金剛寺には国宝や重要文化財などが数多く残り、重要文化財の指定を受ける楠木正成の自筆の書状『楠木氏文書』も残存する。今回は正成を考える上で欠くことのできない天野山金剛寺から思考を巡らせてみたい。

天野山金剛寺は、奈良時代に聖武天皇の命のもと、行基によって開かれたと伝えられている古刹である。平安時代の終わりに、高野山からきた阿観上人が後白河上皇と八条女院の帰依のもとに寺院の再興を成した。南北朝時代には後醍醐天皇との関係を築き、観心寺とともに南朝方の拠点の1つとなった。また八条女院の侍女が阿観上人の弟子となり寺の院主となったことや、女性の参詣が可能であったことなどから、いつからか「女人高野」とも呼ばれるようになった。

正成が天野山金剛寺に送った自筆の書状には、幕府軍の進攻があった場合の備えなどを期待する内容が認められる。正成が当寺に経済・軍事・情報力などを期待したことは想像に難くはない。しかし、それだけであろうか。先に記したように、当寺は、「弘法大師に会いたい」という女性の気持ちを早くから受け入れた寺院であった。正成はここに自身と通じる何かを見出していたのではないか。

楠木正成は、奥河内の地で新しい時代を想い、行動をおこした。

歴史上の人物における心性の復元は、想像の域を出るものではないが、正成は女性の気持ちをいち早く受け入れた天野山金剛寺の持するその歴史性に、「何かが期待できる」という感覚を見出していたと想像したい。